

東京の「カルチエ・ラタン」はどこか？ —中央集権国家における「学問中心地」の日仏比較に向けて—

大前敦巳*

(平成29年8月29日受付；平成29年11月8日受理)

要 旨

小論は、日仏の首都における「学問中心地」の比較という観点から、パリのカルチエ・ラタンに相当する地域が東京のどこにあるかという問いを立て、その歴史的形成過程をたどることを試みた。江戸時代に本郷台地に沿った神田山を東西に掘り開いて神田川が開削され、その北岸に神田明神と湯島聖堂が移設され、南岸は駿河台と呼ばれて武家屋敷が建ち並ぶ町並みに発展した。明治期に入り、湯島の大学設立構想が挫折し、神田一ツ橋にあった洋学機関が東京大学の源流となり、「専門大学校」への発展を期した移転が模索された後、神田お玉が池の種痘所を起源とする東京医学校が本郷に移転したのにつき、帝国大学設置に前後して本郷への集結が進んだ。湯島聖堂がある場所も神田区から本郷区に編入された。東京における「学問中心地」は、湯島から神田、本郷へと重心が移っていった一方、明治初期の「日本型グランド・ゼコール」群や私立専門学校が設立された場所が分散しており、互いに競い合っていた事実も認められる。パリのカルチエ・ラタンが何世紀にもわたってセーヌ左岸に閉じ込められたのに対し、東京の「カルチエ・ラタン」は、各時代の新たな社会状況に適応したアカデミック・ドリフトを伴って獲得されてきた拡張発展の過程であったことが理解される。

KEY WORDS

higher education 高等教育
prewar Tokyo 戦前東京

centers of learning 学問中心地
comparison with France 日仏比較

1 日仏の首都に集権化された「学問中心地」

2006年に改正された日本の教育基本法第7条には、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」とあらためて規定されたが、研究・教育・社会貢献の役割を担う最高峰の学校教育機関としての大学は、1877年の東京大学創設以来、首都圏に集中して設立され発展を遂げた特色がみられる。首都への大学の集権化が図られた国は世界的にみて多くなく、アメリカ、イギリス、ドイツ、中国などの国々では各州・各都市に大学が広く分散しているのに対し、フランスと韓国が集権化された代表例に挙げられる。小論は、中央集権国家として共通点をもつ日仏の首都における「学問中心地」(centers of learning)の比較という観点から、パリのカルチエ・ラタンに相当する地域が東京のどこにあるかという問いを立て、その歴史的形成過程をたどることを試みたい。

有本編(1994)によれば、「学問中心地」とは、世界的な観点から学問的生産性(academic productivity)やそれを支える条件をリードする頂点をなす国や地域を意味するとともに、各国の学界の中でも、研究大学を基軸に様々な学問分野の生産性が最高レベルにある大学・機関・地域などのことを指す。それは、中心部分と周辺部分からなる成層を形作っている一方で、競争による変化をもたらすものであり、「学問の世界では、常に頂点をモデルとしてアカデミック・ドリフトが生じ、地位の新陳代謝が生じるのが常態であり、国内の頂点を他の周辺部分の機関が追いかけ、やがて抜き去るように、他の国々は国際的な頂点のすぐれた点や条件を取捨選択し、それを凌ぐための条件整備を着々と進めている」(有本編, 1994: p.21)と述べられる。

イギリス、フランス、ドイツ、アメリカの高等教育を比較したBen-David(1977=1982: p.8)は、19世紀初頭からフランス、ドイツ、アメリカの順に世界の高等教育の中心およびモデルとしての役割を果たし、イギリスは第二の役割を長期的に果たし続けてきたと指摘した。フランスにおいては、中央化を進める官僚と専門職のギルドとのあいだにあった敵対関係がフランス革命によって撤去され、それ以前からも中央政府を支援者とする教育改革運動が起こっており、「教育制度全体を政府に従属させることは、ことに革命以降、政府が国民の代表になった、あるいはそう思われるようになったときから、進歩的な動きだと考えられた」(Ben-David, 1977=1982: p.26)と記される。

*学校教育学系

日本の高等教育は、世界的な中心地を極めておらず、「西欧流の科学的風土がない状態から明治維新後に一挙に欧米モデルの大学像を移植して科学の制度化を追求した点で、欧米諸国とは異なる困難に見舞われたといわざるをえない」（有本編，1994：p.372）と指摘されるが、特に東京の旧帝国大学から学界の人材が多く輩出され、学問「周辺国」からの脱皮を目指した学問的生産性の条件の集中化が図られてきた。フランスにおいても、19世紀にドイツに「学問中心地」の移動が起こってから、基礎研究に対して開発研究の遅滞を取り戻す国家政策が動員され、選抜的な高等職業養成教育を行うグランドゼコールや科学技術の研究所が、旧来の大学も巻き込む形でその大きな役割を担ってきた。

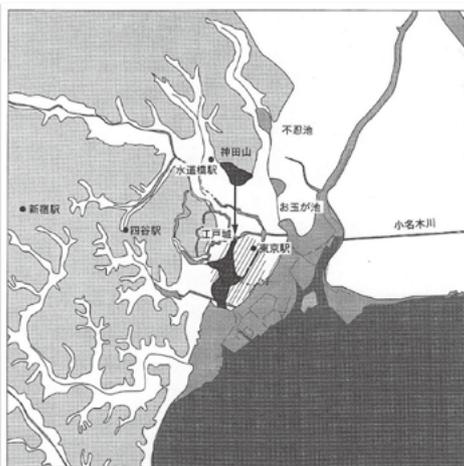
このように日本とフランスは、異なる歴史的な文脈を持ちながらも、東京とパリを首都とする中央集権の近代国家を形成することによって、国内の「学問中心地」を発展させてきたという共通する特色が認められる（大前，2016，2017）。パリにおいては、セヌ川左岸に12世紀頃から形成されたカルチエ・ラタンと呼ばれる地域が、国内外から人々を呼び寄せる「学問中心地」になってきた。カルチエ・ラタンとは、中世からラテン語に基づく古典教育が行われてきた街区という意味であるが、13世紀来のパリ（ソルボンヌ）大学だけでなく、高等師範学校、理工科学校、鉱山学校などのグランドゼコール、コレージュ・ド・フランス、王立植物園なども、その近隣に設置された。

以下では、パリのカルチエ・ラタンに相当する「学問中心地」が、東京のどこでどのように形成されてきたかをたどることを試みる。現在の区域名称から考えれば、東京大学、東京医科歯科大学、お茶の水女子大学、筑波大学大塚地区の国立大学のほか、東洋大学、拓殖大学、順天堂大学、日本女子大学などの私立大学が集中する文京区が当てはまると思われるが、文京区自体は、戦後1947年に旧本郷区と小石川区が合併して新設されたものである¹⁾。小論は、主に先行二次資料を借用しての素描にすぎないが、現在の「学問中心地」としての文京区の実現に至った変遷をさかのぼって検討することにした。

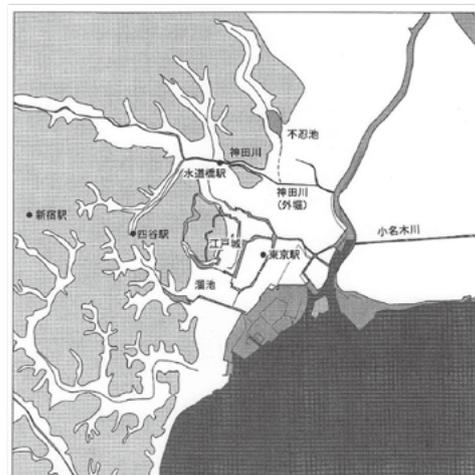
2 神田山から本郷台・湯島台・駿河台へ

東京の地形における歴史的変遷から文京区近辺を概観してみると、1590年の徳川家康の江戸入国以前は、本郷台地に沿って北側からせり出した神田山と、その西側に小石川谷、東側に根津谷の低地が入り込む地形であったことが知られている。地下鉄都営新宿線が通る靖国通りが神保町から小川町にかけて南に湾曲しているのは、神田山の山裾をなぞった跡であると指摘される（竹内，2013：p.8）。さらに西には、現在の神田川から日本橋川へと向かうような方角で平川が流れており²⁾、河口は現在の東京駅近くまで海が入り込んだ日比谷入江に注いでいた。家康の入国時は、中世までのおだやかな内湾的環境から海退が進み、田や沼や湿原の広がる土木事業の実施しやすい自然環境に変化しており（池田，2014）、江戸城の大普請に向けて平川の流路変更を伴う大規模な土木事業が展開された。

家康は、1600年の関ヶ原の戦いの勝利後、神田山を掘削して日比谷入江の埋め立てを開始し、家康が没した16年から二代将軍秀忠のもとで神田山を東西に掘り開いて、現在の神田川の流路にあたる形で平川を開削して付け替え、旧流路を利用して外堀を設ける事業が着工された（唐津・榎本・池田・高杉編，2004，p.8.および下図）。その後も拡張工事が重ねられ、60年に仙台藩主伊達綱宗により「仙台堀」と呼ばれる拡幅が企てられてから航行が可能な要路になっていった。神田山は、川を挟んで南北に分け隔てられ、南側は駿府から家康没後の直臣が移住してきたことから駿河台と呼称され、北側は本郷台、湯島台と呼ばれるようになり、武家屋敷が建ち並ぶ町並みに発展していった³⁾。



図③ 日比谷入江埋立て期〔家康・将軍 慶長8(1603)年〕



図④ 平川流路変更と神田川の開削期〔秀忠・将軍 元和2(1616)年〕

出典：唐津・榎本・池田・高杉編，2004，p.11.

また、1616年には、平将門の首塚近くの社（武蔵国豊嶋郡芝崎村・現千代田区大手町付近）で1309年から称したとされる神田明神が、1603年頃に駿河台に移って仮鎮座した後、現在の外神田に遷座し江戸総鎮守の神として祀られた⁴⁾（神田明神史考刊行会、1992：pp.219-222）。神田川の北岸には、1629年に水戸藩邸が小石川後楽園の地に拝領され、林羅山が30年に上野忍丘に開いた儒学塾が90年に湯島に移り聖堂を創建した。その後、1790年の松平定信による寛政異学の禁のもとで97年に幕府直轄学校として昌平坂学問所（昌平黌）が開設され、湯島が江戸幕府の家臣を中心とする学問の府になっていった。1792年と1800年には黌舎が増築され、1786年の火災の後仮建築であった大成殿（聖堂）も99年にその改造が竣工し、1923年の関東大震災で消失するまで存続した（大久保、1943=1997：p.95）。

山田（2003）によれば、神田山と平川の周辺に位置していた「江戸郷」「湯島郷」「本郷」の地名は古来から存在し、家康入国以前の湯島と本郷の位置関係については諸説あるとされ、北条氏の時代には江戸から「神田の台」「神田の坂」を登り本郷台地を経て岩付（現さいたま市岩槻区）に至る道が通っていた可能性が高いと指摘される。徳川時代に五街道が整備されてからは、中山道（現本郷通り）に沿って町の区画が割り振られた。現本郷三丁目付近の雑貨店「かねやす（兼康）」を目印に、「本郷もかねやすまでは江戸の内」と言われたように、街道との深い結びつきが人々に語り継がれてきた。その手前の旧神田旅籠町（現外神田一丁目）付近もまた、「江戸時代以前、則ち慶長年間に湯島に今の旅籠町があつて、江戸城の大手前より本町（今の日本橋にある）を経て奥の方への町の終りとなし、それより湯島本郷を通りて板橋へ通じたのである」（小野編、1935：pp.16-17）と述べられる。

江戸時代後期の湯島昌平黌には、幕臣を官費制によって収容した寄宿寮と、諸藩士・浪人（処士）が林家または御儒者の門人の資格で入学を許された書生寮があり、後者には学問を既修した俊才が集まり、幕末には一種の志士の集会所のようになったとされる（大久保、1943=1997：pp.91-93）。近辺には漢学者が多く居住するようになり、孔子の出生地にちなんで名づけられた昌平の文字が坂の名称などに用いられ、薬研の底のように深く掘られ風光明媚の地になったお茶の水一帯の神田川を、後に東京高等師範学校（現筑波大学）の同窓会名称になった茗溪と呼んだりするようになった。

3 湯島から神田・本郷へ

明治新政府のもとで1868年に昌平黌は昌平学校となり、同年8月には王政復古の思想に根ざした大学校を設立する構想が出され、翌69年に大学校に改称したが⁵⁾、その構想は漢学派と国学派の対立抗争が繰り返された中で挫折し、同年12月に大学（本校）と改称した後、70年に閉鎖され、71年には廃止に至った。昌平黌の跡地には、71年に文部省、72年に師範学校が設置され、その西隣には75年に女子師範学校が開設された。

1872年の学制から5年を経て77年に創設された東京大学の源流にあたるのが、1684年に安井算哲（渋川春海）が任命された天文方を起源とし、19世紀に入り蕃書和解御用、洋学所、蕃書調所、洋書調所、開成所と名称を変えて、1868年に開成学校となった洋学の専門機関である。天文台があった浅草や九段から、1855年に洋学所を神田小川町に建設することが決まったが、同年の安政の大地震により飯田町九段坂下に変更された。56年に蕃所調所に改称された後（57年開校）、58年より幕臣に加えて陪臣の入学が許可され、59年に小川町の勘定奉行松平近直の手狭な邸宅に移された。寄宿寮は幕臣のみに限られていたが、62年には陪臣にも新たに許可されるようになり、昌平坂学問所になって書生寮を建てること決定された（東京大学百年史編集委員会編、1984：pp.26-27, 36）。同年に洋書調所に改称した際、一ツ橋門外の護持院ヶ原と呼ばれる火除地になっていた場所（現如水会館付近）に新築されて移転した。この場所には、徳川綱吉の時代から筑波山護持院元禄寺が建立されていたが、1717年の大火で焼失した後、堀に沿って広大な原野が広がっていた。

明治初年に開成学校に移行する際、所轄が変更されたこともあり一時的に築地などに移転したが、開校前の1868年12月に再び元の場所に戻された（東京帝国大学、1932：pp.116-118）。それまでの外国人教師は、66年に長崎に来朝し翌67年に招聘されたオランダ人化学者のハラタマ（K. W. Garatama）1名のみであったが、68年暮にはフランス人（F. Pousset）とイギリス人（S. Parry）⁶⁾の2名が外国人教師として招かれ、開校後の69年4月にはオランダからアメリカに渡ったフルベッキ（G. H. F. Verbeck）が招聘され、70年から教頭を務め、その後は多数の外国人教師が招聘されるようになった（大久保、1943=1997：p.154, p.201）。同年7月までに外国人教師は9人になり、71年3月には17人に達した（東京大学百年史編集委員会編、1984：pp.185-189）。75年『東京開成学校一覧』によれば、学校長畠山義成、学校長補濱尾新のもとで、外国人教頭モルレー（D. Murray）他アメリカ人教授7人、フランス人教授7人、イギリス人教授5人、ドイツ人教授4人、日本人五等教授市川盛三郎（製作学）1人、日本人助教員10人の教員からなっていた。

1871年の大学（本校）廃止後に南校となった時、神田一ツ橋周辺地域を囲い込んで校地・校舎を獲得し⁷⁾、将来の

専門教育充実に備えようとする文部省上申書が提出されたが、その構想が挫折して72年の学制のもとでは第一大学区第一番中学に再編された(寺崎, 1978 : p.7)。翌73年に文部卿大木喬任による「学制二編追加」で、「外国教師ニテ教授スル高尚ナル学校」としての専門学校が規定され、「其學術ヲ得シモノハ後來我邦語ヲ以テ我邦人ニ教授スル」ことを目的とする「師範学校同様ノモノ」であると性格づけられ、「小・中学校段階における外国人依存政策の否定、それと対照的な『外国人による専門学』教育の重視とその形而下的技術学への限定、という二つの路線」(寺崎, 1978 : p.6)が成文化された。それにより、同年に専門学校としての新たな開成学校が、外国語学校と分離する形で設置され、前者は東隣の神田錦町(現学会館付近)の「東京大学発祥の地」の石碑がある場所に新校舎が落成して移転した⁸⁾。翌74年に開成学校が東京開成学校に改称したのと同じ頃に、旧校地にある外国語学校は東京外国語学校と呼ばれるようになった(野中, 2008 : p.14)。そのうち英語科は、同年に東京英語学校となって独立し、東京開成学校への進学準備に傾注するようになり、77年には東京開成学校普通科(予科)と合併して東京大学予備門を設立するに至った(新谷, 1980, 天野, 2009 : pp.24-31)。

それに相前後して、南校教頭のフルベッキらによる建議を通じて「専門大学校」への発展を期した移転計画も進められ、72年7月に、(1)神田一ツ橋の現地、(2)文部省敷地(旧湯島聖堂)、(3)上野山内、(4)神田駿河台の4候補地の中から、神田駿河台を最適地とする結論を出したが計画は立ち消えになり、続いて72~73年の間に東校(医学校)の移転を含め上野山内の用地を譲り受けたが、東校オランダ人教師のボードイン(A. F. Bauduin)による上野公園建設の提言がなされ中止となった(寺崎, 1978 : pp.7-9, 1992=2007 : pp.27-29)。さらに、75年には岩倉使節団で欧米の大学を見学した文部大輔田中不二麿により千葉県管下下総国葛飾郡真間国府台(現市川市国府台・現東京医科歯科大学教養部付近)に移転する伺書が出され、邦語で高等レベルの学術に到達する「大学校」設立に向けた用地買収を始め、当時すでに東校(医学校)の本郷移転が計画されていた方針に集約されていったが、文部省は、77年の東京大学設立以降も80年あたりまで国府台の敷地確保整備に努力を続けていた(寺崎, 1978 : pp.11-13, 1992=2007 : pp.30-31)。

他方、一ツ橋付近には1877年に華族学校としての学習院が開設され、86年の火災に伴い移転するまで当地に存在した。84年には高等商業学校が東京外国語学校内に同校附属として置かれ、85年に同校は、京橋区木挽町(現銀座付近)から移転してきた東京商業学校(現一橋大学)に統合された。また、文部省は、72年に湯島から常盤橋内旧小笠原邸(現大手町付近)に移転した後、77年に竹平町(現一ツ橋毎日新聞東京本社付近)に移転し、1923年の関東大震災で被災し永田町の文部大臣官舎に仮事務所が設けられるまで文教の中心地であり続けた⁹⁾。当地は、72年2月に南校境内に創設された官立女学校が、同年11月に新築移転し東京女学校に改称してから、77年2月の閉校まで英学重視による女子教育を行った場所であり、閉校後は東京女子師範学校に併合されて附属高等女学校になるに至っても、明治新政府による近代女子教育建設を通じた指導者養成の意志を刻み込んだ歴史的意味があったと評価される(青山, 1970 : pp.537-541)。

近隣の神田駿河台付近には、明治10年代に入って法律系の私立専門学校が多く集まってきた(伊佐, 2006)。1880年に駿河台北甲賀町(現神田駿河台)に創設された東京法学社(現法政大学)が、翌81年に東京法学校を開校(その後神田錦町に移転)したのをはじめ、80年に京橋南鍋町(現銀座付近)に開設された専修学校(現専修大学)は、82年に神田区中猿楽町(現神田神保町)に移った後、85年に神田区今川小路(現神田神保町)に移転した。81年に麴町区数寄屋橋内(現有楽町)に創設された明治法律学校(現明治大学)は、86年に駿河台南甲賀町(現神田駿河台)に新校舎を建設し移転した。85年には英吉利法律学校(現中央大学)が神田区錦町に、89年には日本法律学校(現日本大学)が麴町区飯田町(現飯田橋)に設立された。

現在の東京大学がある本郷の加賀前田藩上屋敷跡地に最初に移ってきたのは、1858年に伊東玄朴ら蘭学医82名の出資により神田お玉ヶ池(現千代田区岩本町)に開設された種痘所を起源とし、火災で焼失した後、翌59年に下谷和泉橋通(現台東区台東)に移転し、医学所、東校などを経て、74年に東京医学校に改称した医学の専門機関である。69年に南隣の津藩藤堂和泉守上屋敷跡地(現千代田区神田和泉町)に移って横浜から移転した病院と合併したが、土地が湿潤で市街地に密接していたため、他に適当な地を探して移転すべきという議論が早くから起こっていた(東京帝国大学, 1932 : p.433)。当初の上野山内への移転計画が暗礁に乗り上げた中、74年11月以降に文部省用地となっていた本郷元富士町の旧前田藩邸が移転先として定められた¹⁰⁾(東京大学百年史編集委員会編, 1984 : p.400)。75年7月に建設工事が着手され、76年11月には校舎が完成し移転を完了した(東京帝国大学, 1932 : pp.439-440)。

1877年4月には、東京開成学校と東京医学校を合併して東京大学が設立された。この時点ではまだ本郷には医学部しかなく、法学部・文学部・理学部と予備門は神田錦町に置かれてキャンパスが分散していた。同年には、教育博物館の所管であった小石川植物園が、東京大学の附属になった。当初は東京大学の長である「綜理」も、医学部(池田謙齋)と法文理三学部(加藤弘之)の2人が置かれたが、81年に1人の「総理」(加藤弘之)に統一された。神田か

ら本郷への移転は、東京開成学校時の75年に医学校との統合を見越して文部大輔田中不二麿から伺書が出されていたが、同年中に計画が頓挫し、東京大学設立後に持ち越された（東京大学百年史編集委員会編，1984：pp.507-508）。77年には実験を伴う理学部の新築移転を優先する計画が出されたが、費用の関係で実現の容易な法文二学部から先に移転することが翌78年に決まった。80年3月から校舎の着工が始まったが、当時の物価騰貴と財政難に阻まれて一旦中止になった後、82年2月に工事再開となり、84年8月に法文二学部が本郷に移転し、85年9月から理学部の移転も敢行された（東京大学百年史編集委員会編，1984：pp.509-514）。法文理三学部の予備門は、82年に医学部予科を吸収して本費と分費とし、84年には両者を統合し、また85年には東京法学校予科と東京外国語学校独語・仏語科を併合し、帝国大学が発足した86年に中学校令により第一高等中学校となって独立した後、89年に一ツ橋から本郷向ヶ丘（弥生）に移転した。

1885年に第一次伊藤博文内閣が発足し、初代文部大臣に就任した森有礼のもとで86年3月に帝国大学令が公布され、本郷を拠点として、「国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スル」総合大学へと発展を遂げた。84年に司法省から文部省に移管された東京法学校が、85年に本科を法学部に併合し、85年に工部省から文部省に移管された工部大学校は、86年に帝国大学に統合され、88年に虎ノ門から本郷に移転した。「こうして明治二十一年七月には、五分科大学がすべて本郷構内に集結し終ったのであって、これ以後明治末年から大正時代にかけて、かなりの速度でキャンパス内は整備されていく」（東京大学百年史編集委員会編，1984：p.877）と述べられる¹¹⁾。本郷への「学問中心地」の集結は、明治政府が東京遷都に向けて外堀（神田川）の内外に設定した「郭内」から「郭外」へと中心地を移したことになり（松山，2004，2014）、高等教育政策においてはそのような二元論的な東京の都市空間形成とは関係がなかったと推察される。

帝国大学令公布後の1886年8月14日には、東京府令第9号により湯島聖堂が置かれたかつての「学問中心地」である高等師範学校周辺の地域が、神田区から本郷区に編入された（文京区役所，1978b：pp.187-188）。湯島聖堂が作られる以前の寛文年代1671～73年の新板江戸外絵図（遠近道印作，国立国会図書館蔵）には、中山道沿いの当地付近に湯島二丁目と記されていたが、82年の大火で全焼して御用地に召し上げられ、聖堂用地にされた後、湯島二丁目の町名が消滅し、明治期に入っても欠番にされていた¹²⁾（『平凡社日本歴史地名体系13 東京都の地名』，p.511）。1878年の郡区町村編制法により東京府に15区6郡が置かれた際、この地域は神田区に編入されて神田宮本町（北側に隣接する神田明神の社地であったことに由来する）となった。86年7月3日に本郷区長加藤治幹と神田区長澤簡徳が、東京府知事高崎五六宛に神田宮本町内の聖堂兼師範学校所在の地を本郷区に編入する上申書を提出し¹³⁾、7日に高崎知事が内務大臣山県有朋宛に伺書を出した後、8月9日に山県内務大臣から「書面伺之通」の承諾を得て、14日に府令公布となった。高等師範学校は事前に本郷区への編入を承知していなかったようであり、2日後の16日付の文書（乙第一〇〇號）で、東京府に対して次の問い合わせを行っている。「今般貴府令第九號ニ依レハ本校所在地ハ何レニ編入相成候哉矢張宮本町ノ部分ニ候歟此段及御問合候也」（明治十九年本廳命令録壹号 庶務課地籍係，p.74，東京都公文書館蔵）。

明治維新後の湯島聖堂近辺の区画は、1869年の名主制度廃止に伴う50区制では29番組に組み込まれ、神田明神が含まれる31番組と区別されていた。71年の戸籍法公布に伴う大区・小区制の施行時には、神田宮本町となって神田明神と同じ第四大区五小区に編入された。72年の学制発布に伴う学区制においては、第一大学区第四中学区に属することになった。78年の15区制が置かれる前には21区案もあり、本郷区と神田区においては、湯島、駒込、神田、外神田の4区に分かれる案で、これらは江戸時代の地域区分をそのまま区名に採用する動きであったとされる（文京区役所，1978b：pp.178-180）。神田川の開削後、外神田と湯島の境界に移ってきて江戸総鎮守の信仰を集めた神田明神が、その後の区割りに複雑な影響を与えたと推察され、当地の住所は現在も千代田区外神田となっている。『本郷區史』には、「此地は元來湯島に屬するのであるが、門前町たる西町、門前町、表門前、裏門前皆冠するに神田明神を以てし、其後に起立せる神田明神下同朋町、神田明神下御臺所町、神田明神下御賄手代屋敷等皆神田明神を稱するに至り、明治十一年舊江戸市街を十五區に分割するに當つて此地を神田區に屬せしむるの素因を作つたのである」（本郷區役所編：1937：p.103）と記される¹⁴⁾。帝国大学設立との関係は不明であるが（初代総長は東京府知事も務めた渡邊洪基であった）、それと同時期に本郷区が湯島を編入したことは、戦後の文京区に連なる「学問中心地」としての象徴的な優位性を高めたと考えられることはできるだろう。

4 獲得された「学問中心地」

以上のように小論では、東京における「学問中心地」の形成をたどってきたが、湯島から神田、本郷へと重心が移っていった一方で、学問の拠点となった機関が分散し、互いに競い合っていた事実が認められることも強調して

おきたい。

明治初期には、工部省管轄の工部大学校が、1871年に虎ノ門の延岡藩内藤能登守上屋敷跡地（現文部科学省付近）に設立された。同年に司法省は、明法寮を永楽町の松本藩松平丹波守上屋敷跡地（現千代田区丸の内大手町付近）に設置し、75年に司法省法学校を開設した。注11に記したように、駒場には78年に農学校が開校した。これらの学校が帝国大学に統合される以前には、官立専門学校としての「日本型グランド・ゼコール」群（天野，2009：pp.32-37）が屹立していた。また、一ツ橋には（東京）（高等）商業学校・東京外国語学校があったほか、81年に蔵前浅草文庫跡地（現台東区蔵前）に東京職工学校（東京高等工業学校を経て現東京工業大学）が設立された。

私立専門学校においては、1858年に福沢諭吉が江戸築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内（現中央区明石町）に蘭学塾を開き、翌59年に英学に転向した後、芝新銭座（現港区浜松町）に移った時期もあり、68年に慶応義塾と命名され、71年に三田の島原藩中屋敷跡地（現港区三田）に移転して現キャンパスに至っている（慶應義塾史事典編纂委員会編，2008：pp.3-15）。築地鉄砲洲は、明治期に外国人居留地となり、立教学校や女子学院などの私立学校が多く設立され（川崎，2002），現在も記念碑が残されている（また当地の病院を母体とする聖路加国際大学がある）。明治14年の政変で下野し翌82年に立憲改進黨を結成した大隈重信は、同年に別邸のあった「都の西北」たる南豊島郡早稲田村・下戸塚村（現新宿区西早稲田・戸塚町）で東京専門学校（現早稲田大学）を設立し、開校式では同志の小野梓が「学問ノ独立」を宣言した（早稲田大学大学史編纂所編，1978：pp.422-468）。このように今日も最有力の私立大学が、歴史的には「学問中心地」から距離をとった立地で建学の精神に基づく教育を行ってきたのは象徴的であり、東京周辺に設立された数々の私立学校の影響力を見逃すことはできない。

東京大学が本郷に移転してからも神田には、神保町を中心に書肆街が形成された。明治10年代以降に神田書肆街が急速に発展したのは、一ツ橋に官立学校が設置されたほか、新政府の手に渡った旧武家屋敷に華族、高官、実業家、学者、医者が居住するようになり、さらに空家・空地になったところに学校や塾が建てられ¹⁵⁾、書物の需要が増加したことが指摘される（脇村，1979：pp.82-84）。また、神田神保町一丁目に6年間住んで地域文化を探究した鹿島（2017）によれば、神田川以南の駿河台から九段坂あたりまでが生活領域になり、新刊書が出版された日本橋界隈の商業地区とは異なり、「神保町に古書店が形成されたのは、東京大学や大学予備門、および東京外国語学校に通う学生たちが外食その他に使うための『軍用金』を捻出するために、手持ちの本を『質に入れ又は売却』する便宜をはかるためというのが一方にはあった」（鹿島，2017：p.81）と述べられる。

麹町出身の児童文学者巖谷小波の四男である巖谷（1984=2004）によれば、東京の文壇においても旧麹町・神田区では生家や下宿先となった屋敷と、文化的な経験や出会いをもたらした学校が基盤になり、料理店や劇場などの集い場があったことも手伝って、数々の作家が文芸グループを作り活動を繰り広げる場が形成された。それに対し、旧日本橋・京橋区では銀座や新橋などの商業地域を中心に、新刊書、洋書、新聞などの出版・販売会社が集まり、月給や原稿料で収入を得る新聞小説や挿絵の作家が活躍した様子が描かれる。戦後に入り1960年代末から70年代初頭の学生紛争時には、フランスの68年5月を模して駿河台近辺が「神田カルチェラタン」と呼ばれ、バリケードが築かれる場所になった（神田警察署史編集委員会編，1975：pp.326-329）。

本郷においても、明治期以降に文人、学者、学生が多く居住するようになり、坪内逍遙、森鷗外、夏目漱石をはじめ学生の生活風景を描いた小説が書かれ、近代文学の発祥となるゆかりの地になっていった（文京区役所，1978b：pp.948-956）。また、東大本郷キャンパス周辺は、旅人宿と兼業した下宿が盛んな地域になり、キリスト教伝道のための教会なども多く集まったが、「大学街」として市街地が形成されたわけではなく、「知的・景観的イメージと知識階級の居住が相乗的効果を発揮し、文教地区の実体が形成されるものと考えられる」（渡辺，1988：p.12）と記される。

天野（1977）は、明治10年代に神田から本郷への移転を伴った東京開成学校・医学校→東京大学→帝国大学に至る発展が、「洋語」による「西洋学校」から「邦語」による「真ノ大学校」への転換を企てる文部省の当初構想が放棄された後、留学から帰国した邦人教師が外国人教師に取って代わり、教授言語が英語から日本語に切り替えられる過程を経て大学の「日本化」を進行させたものの、「しかしそれが『西洋学校=洋学大学校』の遺産をひきずったままの『日本化』であったことを見逃してはならない」（天野，1977：p.6）と指摘する。東京（帝国）大学の本郷キャンパス集結後も、関東大震災後に陸軍代々木練兵場への移転、戦後に本郷から上野に至る国際文教地区の建設、大学紛争後の1970年代に立川基地跡地への移転が構想され、いずれも実現されることはなかったが、「大震災以後、約4半世紀毎に構想されたキャンパス移転は『断念』の連続であった」（中野，1988：p.26）と述べられる。

他方、湯島にあった（東京高等）師範学校は、1900～03年に大塚窪町に移転した後、73年には新構想筑波大学となって筑波研究学園都市に移転した¹⁶⁾。一ツ橋にあった（東京）高等商業学校は、1920年に東京商科大学に昇格後、関東大震災による罹災を経て1927～31年に「大学町」として国立に移転し、ともに現在に至っている。このように東京における「カルチエ・ラタン」の形成は、各時代の新たな社会状況に適応したアカデミック・ドリフトを伴って獲得さ

れてきた拡張発展の過程であったことが理解される。フランスのパリにおいて、12世紀に修道僧アベラルドゥス (P. Abaelardus) (アベラル (P. Abélard)) がサント・ジュヌヴィエーヴ山の教会で学問の名声を博した頃から形成されたカルチエ・ラタンが、幾度もの都市改造と市域拡大を経ながらも、何世紀にもわたってセーヌ左岸に閉じ込められ続けてきたのとは対照的である。

注

¹⁾ より最近には、2010 (平成22) 年の文京区基本構想において、「文の京 (ふみのみやこ)」の名称が文京区に帰属し、新たな自治都市の姿として文京区を称するものと規定された (文京区, 2015)。

²⁾ もっとも日本橋川は、徳川家康が江戸入国後に物資運搬の目的で道三堀を開削し、平川を現在の隅田川河口にあたる江戸湊につなげて流路変更したのが原型となり、また神田川開削後の外堀の設置に伴って一部が埋め立てられた後、1903年に洪水対策のため再開削されて神田川に接続したものであり、かつての平川の流路とは異なる。

³⁾ 1820年代の文政期における江戸市中地誌を編纂した『御府内備考』の「神田川」の項には、神田川開削以前から本郷と駿河台が細流によって隔てられていたと主張した次の記述がみられる。「然るを世の人、駿河臺と本郷とは元山丘一連の地なりしを、綱宗新に堀割て今の地形に變ぜしといひ傳ふるは誤なり。本郷なり本郷と駿河臺との間の谷にもとより細流在しを、堀廣げしめ給へるに過べからず。」(蘆田編, 1929 : pp.101-102)

⁴⁾ 湯島近辺には神田明神のほか、江戸城の拡張工事に伴って東・西本願寺など多くの寺院が集められたが、1657年の明暦の大火によって移転していった (小野編, 1935 : p.15, 文京区役所, 1978a : pp.693-700)。

⁵⁾ それに先立ち、1868年2月に国学派の矢野玄道・平田鉄胤・玉松操が学校制度取調の命を受け、上代の大学寮に依拠した「学舎制」を採用した一方、これとは別個に3月に京都で学習院を再興して4月に大学寮代と改称したことで派閥抗争が激化し、9月には皇学所と漢学所を並立させて政府が「学舎制」を具体化する調停を図った (大久保, 1943=1997 : pp.177-181)。そのような状況下で東京では6月に昌平学校と医学校 (医学所)、9月には開成学校が復興され、8月22日の布告で大学校設立に言及する一節が記された (東京帝国大学, 1932 : pp.8-9)。「王政復古と人材教育という相異なる課題を内包した政府の大学校構想」(熊澤, 2000 : p.6) が、明治初年の維新官僚を悩ませることになり、69年6月に「大学校設立ノ規則」が公布された後、9月には京都大学校の設置を計画して皇学所・漢学所が廃止され、11月にその計画も中止されて「東西ニ大學ヲ置クノ計畫遂ニ成ラズ」と記され、12月に「大學校ノ名ヲ改メテ大學ト稱ス」こととされた (文部大臣官房文書課, 1941 : p.1-2)。皇学所・漢学所は12月に合併して大学校代となったが、予算の上でも冷遇されて規模は縮小され、翌70年8月に廃止となって京都府に引き渡され、京都府第一中学校の前身となり、上代以来の大学寮の伝統が絶たれた (大久保, 1943=1997 : pp.183-184, 熊澤, 2000)。

⁶⁾ 東京大学百年史編集委員会編 (1984 : p.95) においては、原綴不明とされている。

⁷⁾ 玉井 (2014) は、明治初年の南校と文部省の間でやりとりされた文書『文部省往復』から、南校では廃藩置県まで各藩の石高に応じて推薦・選抜されて入学した貢進生が学生の母体となり、時に「風来教師」と呼ばれて教育能力の低かった外国人教師から教育を受け、寄宿舎や教場が不足したために周辺の武家屋敷の土地を購入して「囲い込む」、校地・校舎の拡張が企てられていったことを明らかにしている。

⁸⁾ 開成学校当局は、当初新築中の校舎には理学科と法学科を置き、他の諸学科を陸軍省所管小川町練兵場、本郷本富士町旧加賀藩邸などに移転することを伺い出たが、文部省には受け容れられず、「即今新築之學校及ヒ在來ノ分ニテ適宜區分相立開業可致候事」と通達された (東京帝国大学, 1932 : pp.264-267)。

⁹⁾ その後の文部省は、大塚の東京高等師範学校内、永楽町 (現大手町付近) の台湾銀行東京支店内、元衛町 (現大手町付近) の東京外国語学校跡を経て、33年に三年町 (現霞ヶ関) に現存する庁舎に移転するに至った (文部大臣官房文書課, 1941)。

¹⁰⁾ 当地には、71~72年頃に南校生徒のための脚気病の養生所が置かれ、73年から外国人教師の宿所 (教師館) が上野山内と並行して設けられており、医学校の本郷移転が決定される頃には学監モルレーら5人が住んでいたが、それ以外の部分は「荒漠タル原野」と化していたとされる (東京大学百年史編集委員会編, 1984 : pp.402-403)。

¹¹⁾ 法・文・理・医・工の5分科大学に加えて、1874年に内務省内藤新宿試験場 (現新宿御苑) に設立された農事修学場を起源とし (77年2月開場)、同年12月に東京府下荏原郡上目黒村駒場野 (現東京大学駒場キャンパス) に移転し、78年に農学校の名称で開校した後、81年に農商務省に移管され、82年に駒場農学校に改称し、86年に東京山林学校と合併して東京農林学校となり、90年に文部省に移管されて帝国大学に併合された農科大学 (1919年から農学部) は、35年に第一高等学校 (旧第一高等中学校) との校地交換により本郷 (弥生) に移転した。

¹²⁾ 西に隣接する昌平坂学問所と高等師範学校・女子高等師範学校があった場所 (現東京医科歯科大学付近) も、中山道の南側が御用地になり、北側の土地 (現東京ガーデンパレス付近) も火災で明地になって町名が消滅したが、この明地を1711年に賄頭支配酢御用達の鳥居次右衛門が拝領し、旧町名にちなみ湯島三丁目とした。この湯島三丁目は、明治維新後の1869年に湯島四丁目に併合され、湯島三丁目の町名も欠番になった (『平凡社日本歴史地名体系13 東京都の地名』, p.512)。なお、上記の旧湯島一丁目~四丁目および妻恋町は、1965年4月1日の住居表示施行に伴い湯島一丁目に統合されたため、現在の町名とは異なる。

¹³⁾ 以下に資料として、本郷・神田両区長による上申書を転載しておく。

神田区神田宮本町ノ内聖堂兼師範学校所在ノ地本郷區へ編入之儀ニ付上申

神田区神田宮本町ノ内聖堂及師範学校等文部省ノ所用ニ係ル地所ノ儀向後本郷區へ編入シ聖堂所在ノ地ハ湯島貳丁目ト稱シ師範学校ノ場所ハ湯島三丁目ト改稱致シ度左ニ其理由ヲ開伸仕候

該地ハ現今神田區中ニ有之候得共其地ノ形勢南ハ湯島壹丁目ニ接シ並ノ方湯島四丁目五丁目ニ連リ神田區トノ關係ハ至テ薄キノミナラス舊記江戸名所図繪及組合町、繪図等ニ散見スル所ヲ閱スルモ湯島ノ聖堂或ハ湯島貳丁目等ノ唱呼有之ヲ如何ナル理由ニヨルカ神田宮本町ノ名称ヲ付セシヨリ都區改正ノ際モ現ニ神田ノ名称アルヲ以テ同區へ編入相成候迄ノ儀ニ可有之殊ニ現今本郷區ノ町名中ニ湯島壹丁目同四丁目五丁目七丁目等有之候ヲ同貳丁目三丁目ト稱スル地所ヲ欽キ往々不便宜ノ稜不少候ニ付テハ前陳之通り本郷區へ編入シ儀御詮議相成度両區長合議之上此段及上申候也

明治一九年七月三日

本郷區長加藤治幹 印

神田區長澤 簡徳 印

東京府知事高崎五六殿

(出典：明治十九年本廳命令録壹号 庶務課地籍係，p.70，東京都公文書館蔵)

¹⁴⁾ 『東京名所圖會 神田區々部』（陸書房，1968：p.223）に掲載された，1900年『新撰東京名所圖會第二十四編』における「神田區之部其五 宮本町」の中では次のように説明される。「當町は從來湯島に屬するを以て。江戸切繪圖等には。本郷の部に記載せり。唯其の地神田神社の社頭に在るに因り。區界を正せし今日に至りては。其の形勢神田に編入せざるを得ず。於て之を當區の地と定めたり。」

¹⁵⁾ 1872年11月調の「開学明細調」（73年1月）に基づく私塾・寺子屋の一覧が，千代田区役所（1960：pp.250-257）と文京区役所（1978b：pp.750-754）に掲載されており，うち神田区には60件，本郷区には25件が認められる（それ以前に廃校になったものは含まれない）。また，85年の神田区には，公立小学校4校（教授者33人，生徒数1,433人），私立小学校39校（教授者89人，生徒数3,183人）が開設されており，「神田区は，日本橋・浅草・京橋の次に学校数が多い」（千代田区役所，1960：p.416）と記される。

¹⁶⁾ 高等師範学校大塚移転後の旧湯島校地は，1875年に御茶ノ水の隣接地に開校した東京女子師範学校が，85年に東京師範学校に統合された後，90年に分離独立した女子高等師範学校の校地として使用された。関東大震災で校舎が焼失した後，1932年に現キャンパスがある大塚の兵器支廠跡に移転し，湯島の旧校地は28年に創設された東京高等歯科医学校の拡張に使用され，現東京医科歯科大学のキャンパスに至っている。

付記：本稿は，JSPS科学研究費補助金（基盤研究(C) 15K04353）の助成を受けたものである。

引用参考文献

- 青山なを，1970，『明治女学校の研究』（青山なを著作集第二巻），慶應通信。
- 天野郁夫，1977，「東京大学の『明治一〇年』」，『UP』第6巻12月号，pp.1-7。
- 天野郁夫，2009，『大学の誕生（上）』，中公新書。
- 有本章編，1994，『「学問中心地」の研究—世界と日本にみる学問的生産性とその条件—』，東信堂。
- 蘆田伊人編，1929，『大日本地誌体系1—御府内備考壹—』，雄山閣。
- Ben-David, J., 1977, *Centers of Learning*, The Carnegie Foundation. = 1982, 天城勲訳，『学問の府—原典としての英仏独米の大学—』，サイマル出版会。
- 文京区，2015，「『文の京』普及要項」（改正 27文総第230号平成27年5月25日部長決定），文京区ホームページ<http://www.city.bunkyo.lg.jp/var/rev0/0112/9214/fuminomiyako.pdf>。
- 文京区役所，1978a，『文京区史 卷二』，文京区役所。
- 文京区役所，1978b，『文京区史 卷三』，文京区役所。
- 千代田区役所，1960，『千代田区史 中巻』，千代田区役所。
- 本郷區役所編，1937，『本郷區史』，本郷區役所。
- 池田悦夫，2014，「小石川本郷周辺の自然地形と近世土木事業の実態」，江戸遺跡研究会編，『江戸の開府と土木技術』，吉川弘文館，pp.129-150。
- 伊佐九三四郎，2006，「学校の町，本の町 神田—教育の場 今・昔—」，『地図情報』第25巻第4号，pp.9-13。
- 巖谷大四，1984，『東京文壇事始』，角川選書（=2004，講談社学術文庫）。
- 神田警察署史編集委員会編，1975，『神田警察署史—創立100年記念—』，警察庁神田警察署。
- 神田明神史考刊行会編，1992，『神田明神史考』，非売品。
- 唐津勝敏・榎本幸弘・池田悦夫・高杉美彦編，2004，『江戸の町づくりと神田川一文の京史跡散歩(2)—』，文京区教育委員会生涯学習部文化振興課。
- 鹿島茂，2017，『神田神保町書肆街考—世界遺産的“本の街”の誕生から現在まで—』，筑摩書房。
- 川崎晴朗，2002，『築地外国人居留地—明治時代の東京にあった「外国」—』，雄松堂出版。

- 慶應義塾史事典編纂委員会編, 2008, 『慶應義塾史事典』, 慶應義塾大学出版会.
- 熊澤恵里子, 2000, 「明治政府の大学校構想と京都学校問題」, 『東京大学史紀要』第18号, pp.1-16.
- 松山恵, 2004, 「『郭内』・『郭外』の設定経緯とその意義—近近代移行期における江戸, 東京の都市空間(その5)—」, 『日本建築学会計画系論文集』第580号, pp.229-234.
- 松山恵, 2014, 『江戸・東京の都市史—近代移行期の都市・建築・社会—』, 東京大学出版会.
- 文部大臣官房文書課編, 1941, 『文部省沿革抄』, 文部大臣官房文書課.
- 中野実, 1988, 「東京大学の本郷キャンパス集結とその後の移転構想」, 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編, 『東京大学本郷キャンパスの百年』, 東京大学総合研究資料館, pp.23-26.
- 野中正孝編, 2008, 『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち—』, 不二出版.
- 大久保利謙, 1943, 『日本の大學』, 創元社 (=1997, 『日本の大学』, 玉川大学出版部).
- 大前敦巳, 2016, 「パリ地域圏における大学拡張過程」, 『上越教育大学研究紀要』第36巻1号, pp.31-39.
- 大前敦巳, 2017, 「戦前東京における官立大学のキャンパス拡張—東京文理科大学創設に向けた高等師範学校の事例を中心に—」, 『上越教育大学研究紀要』第36巻2号, pp.307-316.
- 小野桂編, 1935, 『湯島一丁目と付近の今昔誌』, 本郷區湯島一丁目町會.
- 新谷恭明, 1980, 「東京大学予備門成立過程の研究」, 『東京大学史紀要』第3号, pp.1-11.
- 竹内正浩, 2013, 『地図と愉しむ東京歴史散歩—地形篇—』, 中公新書.
- 玉井建也, 2014, 「『文部省往復』からみる明治初期の『大学』成立過程」, 『東京大学史紀要』第32号, pp.1-13.
- 寺崎昌男, 1978, 「東京大学創立前後」, 『東京大学史紀要』第1号, pp.3-15.
- 寺崎昌男, 1992, 『プロムナード東京大学史』, 東京大学出版会 (=2007, 『東京大学の歴史』, 講談社学術文庫).
- 東京大学百年史編集委員会編, 1984, 『東京大学百年史 通史一』, 非売品.
- 東京帝国大學, 1932, 『東京帝国大學五十年史』, 非売品.
- 山田邦明, 2003, 「古代・中世の江戸」, 藤田覚・大岡聡編, 『街道の日本史20 江戸—街道の起点—』, 吉川弘文館, pp.31-55.
- 脇村義太郎, 1979, 『東西書肆街考』, 岩波新書.
- 早稲田大学大学史編纂所編, 1978, 『早稲田大学百年史』第1巻, 早稲田大学出版部.
- 渡辺定夫, 1988, 「都市計画としての大学キャンパス」, 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編, 『東京大学本郷キャンパスの百年』, 東京大学総合研究資料館, pp.8-15.

Where is “Quartier Latin” in Tokyo ?

Comparing “Centers of Learning” in Centralized States in Japan and France

Atsumi OMAE*

ABSTRACT

In this paper, we attempted to retrace the historical process of initiating “centers of learning” in Tokyo, Japan through a comparison of process in Paris, France by asking “Where is ‘Quartier Latin’ in Tokyo ?”.

Kanda River was excavated during the Edo period by dividing the north bank, in which Kanda Myojin shrine and Yushima Confucian temple were relocated, and the south Surugadai area of Bukeyashiki (samurai residence). After the deadlock of creating Daigakko Academy in Yushima following the Meiji Restoration, the School of Occidental Studies and Languages became the origin of Tokyo University in Hitotsubashi, south Kanda. The School of Medical Studies in east Kanda had transferred to Hongo district; thereafter, the others faculties redirected their concentrated to Hongo campus in order to create Imperial University. At the same time, the Yushima area was also incorporated into Hongo from the Kanda ward. We can see the shift of “centers of learning” from Yushima, Kanda to Hongo in Tokyo, but Higher Professional Schools and Private Universities were often located in wider dispersed areas, resulting in a friendly rivalry between each other. This paper argues that “Quartier Latin” in Tokyo is a consequence of acquisition with the academic drift adapting to new social conditions, in contrast to its counterpart in Paris which remained on the left bank of the Seine for many centuries.

* School Education